

白金 義

THE
SHIROGANE
YOSHI



病の名借りて懶惰の冬の畫 璃子

人日や有耶無耶として過したる ハ

賀客去る木星もつとも輝けり ハ (穴まどひ平21) 高志選

猫達に御慶を申す我が家風 ハ (ハ) みち選

我が町を一望の丘初詣 ハ

元日のポルカにあわせ歯を磨く 高志

あらたまの仲見世をゆく貸衣装 宏之助

定例句会（二月の兼題..梅、余寒）

二月二十一日（金）アビスター第三会議室 12時 15時
三月二十一日（金）アビスター第1会議室 12時 15時
四月十八日（金）アビスター第1会議室 12時 15時
一月句会報（‘25／1／17 新年一般）太字は当日句

被せ藁陽射しを包み寒牡丹

籠に盛る七種の若菜ばたん苑

琴の音と小鳥の声とばたん苑

西の空光る満月夜明け前

田宮敦子

光成高志

銭湯の朝風呂に入り初詣
近代ビルの間に見える雪の富士

冬日和鶴鴎一羽目黒川

初詣子供もうがい手洗いす
登り降り飛石の坂石蕗の花

藤原秀臣

ふるさとを思ひ切つたる雑煮餅
ラデツキー行進曲に淑氣満つ
冬木の芽そびらに彰仁親王像（上野公園）
蝱梅の咲き満ち朝日透かしをり
煤の渦地を這ひ這ひ来あわんとり
雪の富士見ゆるフロントガラス越し

光みち

閉ざしたる奥社に初日差し込みり

曇天に届けよ炎むらんど焼

根を覆ふ藁を十字に冬牡丹

人日や犬に出来へば犬褒める

寒月の半月映るにわたずみ
寒風やひたすら歩く田んぼ道

浅野正美

初詣鰻を食べて願かけて
妻と行く成人式の晴れ着愛で
初詣皆無口なり願秘めて
正月や散歩の誓いまたも立て
鰻焼く煙を浴びて初詣
金柑を少し啄み飛び立てり

佐藤宏之助

星冴えて眼下に町の灯露天風呂
獅子頭口の中からおめでとう

山尾万世遊

滝水柱割れ散るさまのあつけなく
次々と雲の色染め初茜

出湯灯に枯木の美しき川向ふ

元朝やなにはともあれ大欠伸

オートバイ後ろに女都鳥

えび天も年越そばも頂いて

公園の落葉踏み踏み冬の暮

冬霞はるかに見ゆる筑波山

筑波山赤々染めて冬夕焼

山々を赤く染めゆく冬夕焼

西空に輝く朝の冬の月

佐々木由紀子

えび天も年越そばも頂いて

公園の落葉踏み踏み冬の暮

冬霞はるかに見ゆる筑波山

筑波山赤々染めて冬夕焼

山々を赤く染めゆく冬夕焼

西空に輝く朝の冬の月

山下寿幸

初孫が初髪姿に鐘の音

どんどん焼童手を出し餅あぶる

餅搗きに皆で囲みて真栄寺

菊日和杖持ち歩き一万歩

初孫とテーブル囲み初笑い

手賀の杜見渡す限り冬景色

160 号選句一覧 **選**は高志選。**選**は特選

毒の敷ふるさとを思い切つたる雜煮餅

閉ざしたる奥社に初日差し込みり

毒霧星冴えて眼下に町の灯露天風呂

由安錢湯の朝風呂に入り初詣

手賀沼や波高くして鳴^ニおの声

秀初日待つ波打ち際に爪立ちて

滝水柱割れ散るさまのあつけなく

えび天も年越そばも頂いて

高初孫が初髪姿に鐘の音

の高初詣鰻を食べて願かけて

毒雪の富士見ゆるフロントガラス越し

宏ラデツキ一行進曲に淑氣満つ

の秀雲天に届けよ炎むらじんど焼

毒由獅子頭口の中から祝賀の字

近代ビルの間に見える雪の富士

かいつぶり沼の風波に見え隠れ

敷日向ぼこ猫が通れば猫を見る

高次々と雲の色染め初茜

公園の落葉踏み踏み冬の暮

ドント焼き童が手を出し餅あぶる

正妻と行く成人式の晴れ着愛で
敷寒風やひたすら歩く田んぼ道

冬木の芽そびらに影「親王像（上野公園）

毒虫正敷根を覆ふ蔓を十字に冬牡丹

の秀被せ蔓陽射しを包み寒牡丹

の冬日和鶴鳩一羽且黒川

狭き庭石路つねまきの花黄を放ち

由顔触れの二人欠けて初句会

秀出湯灯に枯木の美しき川向ふ

毒の正冬霞はるかに見ゆる筑波山

餅搗きや皆で囲みて真栄寺

正初詣皆無口なり願秘めて

由西の空光る満月夜明け前

の秀正敷蝶梅の咲き満ち朝日透かしをり

宏人日や大に出手へば大褒める

かごに盛る七種の若葉ぼたん苑

由初詣子供もうがい手洗いす

かいつぶり群れて波間に浮き沈み

冬浜に野良犬が居て殺しあふ

正敷元朝やなにはともあれ大欠伸

正筑波山赤々染めて冬夕焼

宏菊日和杖持ち歩き一万歩

敷正月や散歩の誓いまたも立て

宏金柑を少し啄み百舌鳥は去り

煤の渦地を這ひ這ひ来あわんとり

寒月の半月映るにわたずみ

毒の鳴琴の音と小鳥の声とぼたん苑

秀登り降り飛石の坂石路の花

風荒び石路つねまきの花搖るぎなし

富宏才オートバイ後ろに女都鳥

現代の業平がナナハンの後ろに女をしがみつかせて都鳥」とユリカ

モメの如く飛ばしている時空を超えた様。面白い構成です。

宏山々を赤く染めゆく寒夕焼

三が日アーブル囲み初笑い

鰻焼く煙を浴びて初詣

正富西空に輝く朝の冬の月

手賀の杜見渡す限り冬景色

藤原秀臣エッセイ（13）成田山初詣

例年、初詣は成田山新勝寺と決めているが、今年は一月八日が成田山参拝となつた。平日にしたのでは人出は予想外に少なく参道も歩き易かつた。例年通り先づは、お札を本堂で申し込んでおいて、それぞれの神社仏閣にお参りを済ませた。今年は、出世は特に念頭にないので、お稻荷さんの参拝は止めにして、後は例年通りのルートで成田山初詣とした。どこも空いているので楽だつたし、早めにお札もいたくことが出来て安堵した。かなりの時間が経つても人出は少ないので、いつも混雑しているので敬遠してい

る鰻屋に入つて鰻重をいただくことが出来た。成田山の参道には3～4軒の鰻屋はあるが、「鰻登り」と言つて運勢が良くなり精も付く鰻を食するため、程々の込み具合の鰻屋に入つた。店頭では職人が

次々と手際良く鰻を捌いている。正月早々に殺生はよくないが、職人が手早く捌いて串にさして炭火で垂を着けて焼きあげる鰻の魅力には勝てない。うなぎのかば焼き、鰻丼は古くから贅沢な食品として大衆に好まれ食されてきたものであろう。年一回の初詣の楽しみとして美味しくて活力もつくと言われてゐる鰻丼がもてはやされて今日まで続いているものと推測される。遠く田舎からわざわざ参拝に来て、大ご馳走である美味しい鰻を食する楽しみはまた格別なものであつたに違いない。今日は客がすくないものの、通常は人で溢れて路上に並んで1～2時間は待つことが当たり前とされている。庶民にとつては仏様と鰻どちらも有難い存在であるに違いない。1年の健康も幸せも祈願して肝すいを飲みながら鰻をほおばつているのも悪くない。運勢も体力も「鰻登り」を願つて、正月にはこのお店で一体何匹の鰻が食されていいるのか聞いてみたいものだ。鰻を鰐腹食べた後は、例年どおり米屋の羊羹と甘栗のお土産をいっぱい買い込んで家路についた。おみくじは半吉で

俳窓評論纂

* 12.29 朝日 江戸の「会読」育まれた学びの題にて伊

藤仁斎の古義堂の跡にふれて、仁斎の学問の仕方「会読」の意義についての有田哲文のエッセイ。皆で書経や易經などを読んで、一人が意味を講じ、他の者が疑問点をただし、討論に至る。講じる者が交代し、会読は続く。大学の自主ゼミのような学習法は仁斎の塾を越え、各地の私塾や藩校へと広がつていった。江戸時代は武士と町人を問わず、儒学に専心した。その動機は中国のようない官僚登用のために儒学の知識を問う「科挙」とは違つていた。学問が立身出世に直結していた科挙と違つて「何もしなければ、身分社会の中では草木のようにならか果ててしまう。それを拒否し、生きた証しを残したいと儒学を究めた人たちがいた。彼らに教えを請い、自己修養を目指した多くの人たちがいた」その学び方が「会読」だった。特徴の一つは遊びの要素があつて、誰が書物を深く読めるかを競い合つた。身分の上下に關係なく、実利にもつながらないからこそ、熱くなれた。もう一つの特徴が、異なる意見に出会い、そこから学ぼうとする姿勢だ。加

余り芳しくなかつたが、慎重に、注意深く、楽しく一年を過ごそと肝に銘じながら初詣のご利益を纏つて山門を後にした。

賀藩の藩校・明倫堂は学生にこう求めた。明白な結論に至るため、虚心に討議しよう。みだりに自分の意見を正しいとし、他人の意見を間違いとする心を持つのは見苦しい。この会読は共同研究の場であつて、蘭学、国学、そして明治の初めには自由民権運動に引き継がれた。しかし明治時代は会読がすたれていく時代でもあつた。高級官僚を養成する東大を頂点に学問が立身出世と直結したからだ。「列強に追いつくためには必要だったが、反面日本の学問が『科挙』化したともいえる。真剣に議論を戦わせながらも、お互に認め合う「知の共同体」は忘れ去られていきました」と『江戸の読書会』の著者前田さんは言う。おそらく科挙化は今も進行中だ。大学生が企業のインターンシップに参加するのが当たり前になり、早いうちから就職活動へとせき立てられる。文系学部の学問内容をもつと社会に役立つようにしなければ、との風潮も強まっている。大学と社会が分かちがたいのは当然だが、既存の社会のあり方を絶対視するなら、学問の可能性は狭められる。世襲にしばられた江戸の身分制社会のなか、そこから抜け出すための装置であつた「会読」。育まれた遊びの精神や異論の尊重にはいまも、新鮮な響きがある。(私の手元に伊藤仁斎著の「童子問」がある。この記事を読んでもすぐ思い出した

ので本棚を繰つて／＼探し出し改めて読んだ。小林秀雄が仁斎の日記(日記)を読んで面白く講演していたCDを何回も聴いていたので思い出したのだ。会読という言葉はないが、下巻45章に「子、門人少子の説と雖も、苟いやしくも取るべき者は有るは、皆之に従う。論語孟子を解する皆然り。乃すなむち門人と商榷しようかくし、衆議定まつて、而る後之を書に命ず。若し理に会わざる者有れば之を却しりぞく。是れ子しが識る所なり」という言葉が仁斎の共同研究の方法であつた。仁斎の徳行のすぐれていたことを伝える逸話は多いが、仁斎に反発した徂徠にして「仁斎の実徳ト、熊沢蕃山ノオト、予ガ学問ヲ合テ、聖人が出来スベシ」と云つた記事があつて、一言にしてその徳行の高さを道破した。仁斎は芭蕉と同時代を生きた人である。共に京都に居た時期もあつたが、私の知る限り二人の面識はなかつたようである。)

芭蕉の軽み以後 (111)

光成高志

芭蕉没後83年に箋笠庵(さりゅうあん)梨一(りいち) (一七一七~一七八三) によつて奥細道芭翁孤抄(おくのほたんやがくもじょう)が出版され、その中に文章論が載つており、前回その全文を紹介した。芭蕉の文章を勝手な解釈をしてその書きざまがまちまちになり、弟子であつた各務支考、変名の蓮二房に至つては、祖翁の脈絡が頽廃してしまつたので、後世の人たちに祖翁の文章を見習つてほしいと労を厭わず著者が書き残したものである。全体に通じるのは支考に批判的な書きぶりである。しかしながら、みだりに支考を貶すには非ずとしてその証を一二挙げて間違いを正して

いる箇所もある。支考は蕉門十哲のひとりであるが、芭蕉晩年の弟子であつて、野心を持つて政治的に動く傾向があつた。たとえば芭蕉の病床にあつて師の発句を減後に一集せんと去来に申し出て叱られたような男であつた。そういう何というか、虎の威を利用するというか、先を読んで行動できる才子であつた。これを厭う後世の俳人が多いのであるが、この梨一もその一人であると思われる。支考は現代の堀切実が紹介するところの略歴を下に写しておこう。(寛文5(一六六五)年~享保16(一七三二)、享年六七歳。美濃国(岐阜県)の人。各務ががみ氏。別号、東華坊・西華坊・見龍(竜)・獅子庵、変名に蓮一坊など。幼時、郷里の禅寺に入山したが、19歳で下山して遊歴、元禄3(一六九〇)年、26歳で芭蕉に入門し、『続猿蓑』の撰に加わるなど頭角を現した。師の没後は年毎にその追善供養を営む一方、地元美濃や俳諧発祥の地伊勢を拠点に、遠く北越方面や九州地方にまで精力的な行脚を重ね、広く蕉風俳諧を伝播することに成功した。蕉門随一の論客として、『葛の松原』『二十五条』『俳諧十論』など、多数の俳論書を著わし、姿情論や虚実論を中心とした表現論、また七名人体説などの連句付合論に、豊かな才気を發揮している。正徳元(一七一二)年47歳のときには、自らの「終焉記」を作り佯死(死だまつり)して、世人の悪評を被るような面もあつたが、晩年は後

繼者に廬元坊里紅を得て、いよいよ自派(美濃派)の隆盛を導き、以後一門の流れは今日にまで及んでいる。作風は『俗談平話』を旨として平明であるが、また軽い談理を含んで卑俗なところもある。俳文の確立にも意欲を示し、『本朝文鑑』『和漢文操』などの俳文集を編んでいる。また発句は『蓮一吟集』(一浮編・宝曆5年刊)にまとめられている。『蕉門名家句選(上)』所収の94句のうち5句をしめす。食堂(じきどう)に雀啼くなり夕時雨腹立てる人にぬめくるなまこ哉 船頭の耳のとうさよ桃の花野に死なば野を見て思へ草の花 気みじかし夜ながら老いの物狂ひ。私の手元の芭蕉翁編年誌(昭和33)では右の略歴と少し違つていて。芭蕉に入門したのは元禄4年四月(27歳)となつていて、名古屋より越人の紹介を以て来り無名庵を訪ひて入門す、とある。支考の才能が尋常ではなかつた証として俳家奇人談に書かれている文を写しておく。支考は美濃州の人、はじめ禅門に入て鎮蔵主といへりしは弱冠の頃なり。「吹毛劔也春二月、斷腸牡丹花下風」といへる偈を作つて宗門の高僧(播磨の盤珪禪師)に末頼もしく思はる。東都某寺の大会に碧眼の講主へ八ヶ條の荊棘(けいきよ)を難問す、故に法眷其才を妬み、遂に禪機を挫きたりとかや、時に涼菟其才を惜み俳諧をすゝめて芭門に入らしむ。法眷というのは同じ師に学ぶ同じ法統の仲間、つまり学友に妬まれて禪の修行を挫か

れ、涼菴がその才能を惜しみ俳諧をすすめたのだった。涼菴と云うのは芭蕉が伊勢神宮に参拝した時入門した芭蕉晩年の門人であった。自分と同じように芭蕉に就けとすすめたのだ。私がここで支考に論を及ぼしているのは、支考の「虚に居て実をおこなふべし、實に居て虚をおこなふはかたし」の言葉が残されており、現代の俳人もこの言葉を引用することが多く、支考の俳論のかなめになつてゐるからである。奥の細道を同行者の曾良が書いた随行日記と照合してみると、いかに多くの虚構がなされているかを知ることが出来るが、芭蕉がこうした虚構つまり創作^{フイクション}をどのように考えていたのであるかを考えるに、上の支考の虚実論に關係して考察してみたいからである。支考のことは現代では前記の堀切実氏の研究が一番詳しく丁寧である。氏は早稲田大学で学ばれて文学博士の学位を取得されたらしく、同大学の図書館に支考関係の文献が沢山収蔵されている。後でゆつくり考察できたらいいが、私は氏のような近世文学を勉強したこともなく、まったくお門違いの只の俳人であるので論文的な文章は書けない。そこで急いで私の思いついた思い出のようなことを書いておこうと思う。蛇足に過ぎないが、私の俳句初学の頃山口誓子先生が、虚実の句を好まれたのか、よく選をされた。「太刀魚の曲りたる太刀漁夫が持つ」（大洋平2）「太刀魚の刀身の先斯く細

し（同2）。この句を真似して私は太刀魚を家内に買つてきてもらい、よく見た。そして同じ頃太刀魚の句を沢山作つた。「太刀魚の長き刀身並べ売る」（平2）「太刀魚の長き刀身手に提げる」（平2）「太刀魚の刀身の先へらべらす」（平3）「切口も太刀の断面太刀魚は」（平3）。天狼の遠星集の誓子選は非常に厳しかつたが、以上の太刀魚の句は全部入選した。へらべらすの句は朝日俳壇にも掲載された。太刀魚の句はそれで打ち止めた。太刀魚は名前からして虚実を持つてゐるのだ。太刀に似た魚であるから。太刀魚は実、刀身は虚であり、武士が持つ刀を漁夫が持つてゐる。太刀なのに先は細く、へらべら、刀を並べ売つてゐる、切口も太刀の断面、皆虚にして実、虚は虚構、偽り、嘘、実は信、眞実を意味するもの、これを同時に書いて虚実といふ。俳論において最初に虚実を言い出したのは、芭蕉が初期に就いた宗因である。宗因の虚実は「莊子」からの発想である。莊子は芭蕉も心酔した哲学で本誌の（66～70）に詳述した（二〇二）。莊子における虚実は宇宙人生の理法を解釈した哲學的な意味のもの、すなわち虚は虚無無為という如きもの、実はそうでない意味のものと解される。支考は後にこれを大道の虚実とは、大きなる時は、天地未開を虚といひ、天地已開を実といふ。小さな時は、一念の未生と已生となり。是等は心法の沙汰なれば、念佛に

ては合点まいるまじ。それより手短にして次のような文章を書いている。「貴房は夫婦の実に居て、人が女房を望む時に、我は虚に遊ぶとて人に振舞候はんか。ふるまへば犬猫の所行也。妥に虚実の前後を知て、虚に居る時は女房の不信を恨みず、本より五倫の虚を知るゆへなり。人が女房を振舞へといへば、世法の実をおこなひて人には指もさせぬ也」少し説明を付けて意訳すれば、以下である。「あなたは他人が自分の妻に手を出そうとした時、「虚に遊ぶ」のだと言つて、その人に妻を差し出すのか?もし夫婦の間に実があつたとしてもそれは犬猫のする事ではないか。私の言う「虚実」はそんなものではないのだ。心が自在である(虚に居る)時は、その状況に応じて、何を優先させるべきか(虚実の前後)が分かるから、もし妻が不倫をして、自分への裏切りを恨まないのである。なぜなら、五倫の教えは現実においては絶対ではないことを知つていいからである。人の気持ちなんてころころ変わる。妻の心変わりは、倫理には反するが、それで割り切れないのが人情というものだと、妻の気持ちを優先させて考えられるのである。もしここで、杓子定規に倫理を優先させて妻を非難したところで、妻の気持ちが自分に戻つてくるわけではないのだ。しかし、もし他人が自分の妻をくれと言つてたら、その時は、世間の倫理(世法の実)を優先させて、指一本触

れさせないのである。この自在さが「虚実」の本質なのである。以上は支考の虚実論の具体像である。支考は俳諧を文学の一ジャンルとしてではなく、発想・認識・表現・考え方・心のあり方・生き方、すなわち思想として基礎づけることを目指して奮闘したのだ。この思想としての俳諧という考え方を支考が勝手に作り出したのではない。その思想が師芭蕉の教えであつたから自信をもつて発展させたのだ。三冊子には「戯れに俳諧はいまだ俵口をとかず」と度々語つたのは誰よりも俳諧の思想とはいっての可能性を考えていたからだ。「俳諧を以て文をかくは俳諧文也。歌を詠は俳諧歌也。身を行はゞ俳諧の人也」(『去来抄』)という去来の言葉も芭蕉から教えられたものだろう。しかし温厚な去来と違い、支考はその部分を大袈裟にして肥大化させた。何より支考を惹きつけたのは『葛の松原』(元禄5)に彼が引用した芭蕉の次言葉だつた。「俳諧はなくともありぬべし。たゞ世情に和せず、人情に達せざる人は、是を無風雅第一の人といふべし。」この言葉に支考の俳諧観の原形があると云つてよい。(俳句なんてものはなくたつていいが、ただ、世情に疎く、人情に達せざる人は是無風雅の人と云うのだ。)情とは人間の七情(喜、怒、思、憂、悲、恐、驚の総称)にして動けば善悪となり喜怒となつてそれに従うを道理といい、それにそむくを理屈という(『為弁抄』)。ここでは

道理という言葉が媒介しているが、虚実のことである。

虚実は天地のあり方と人情（つまり氣分）のありかたを貫く統一原理だったのである。支考の目の前にあつた大思想は孔子の儒教でも釈迦の仏教でもすべて世界のあり方からの一貫した説明原理を以っていた。それに匹敵し、さらにそれを越える思想として俳諧を位置づけるために、支考は説明原理としての虚実がどうしても必要だつた。それによつてあらゆることが説明できなければならなかつた。規範を硬直的に守るのではなく、その場その状況にふさわしい臨機応変の対応をすること。何故か。万物が時々刻々変化しており、人情、人の機嫌もそれに従つているからだと支考は言うのだ。支考の虚実論の核は一言で言える。それは、人情の機微を敏感に察知した臨機応変の自在さにある。これは紫式部の源氏物語を本居宣長がもののはれを書いたものだと断定したあのもののはれを知ることだと思う。世間のことをよく知り心の練れた人をもののはれを知つた人と云うではないかとも宣長は言つている。ものののはれを知ると云うことは、ああ可哀そだとかいう感情ではなく、ああこれが人生なんだと認識すること。支考の虚実と同じものだと思う。虚と云うのは現代の科学的知見ではものが現れてまだ名もなく、宇宙の誕生時のものとされる。天地玄黄（げんこう）宇宙洪荒（こうこう）（天は黒く、地は黃色い。宇宙はいまだ混

沌としている）という中国の千字文の冒頭にある状態だとと思う。天地未開を虚といい、天地が既に開いたのを実といふ、と支考は書いている。ともかくも、俳諧を文学の一つとしてみると広い意味、すなわち思想として基礎づける試みだつたのだ。森澄雄という俳人は自分の結社の句会の後、皆の句を評して説教じみた話をいつもしめた。それを書き残した澄雄俳諧という本がある。その中にこの支考の虚に居て云々の言葉を出してこう言うのです。我々の人生はほんとは意味ない、必ず死んでいく人生だから、虚にいるのだ。だからこそ、今を精いっぱい生きて意味を持たせる、そういう覚悟を持つて生きて行く。俳句だつて同じ、覚悟を持つて作句しなければいい句が出来るわけがない。澄雄は教師があり、教師根性で言わなくていいことを言つてはいると思つたけれど、私は人生訓として面白いので、倅の結婚式のスピーチで同じようなことをしやべつたことがある。【参考資料】①支考虚実論の試み・豊かな俳諧史をめざして 中森康之（九州大学学術情報リポジトリ）②支考の虚実論の展開 堀切実（近世文芸26）③芭蕉の虚実論と奥の細道のフィクション 戸部守（茨城大学国語国文学研究会一九五六）④芭蕉の軽み研究史論 金子はな（東洋大学学術情報リポジトリ）

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。白金霞159号をお部お納め致します。雪で遅れがでませんよう!! 本年も一

年誠にお世話になりありがとうございました。みちさんと仲良く良いお年をお迎えくださいませ（2024.12.23 木戸敦子）お便りありがとうございます。26日にシロガネヨンの年会費をお送りしようとしていましたら、猫チヤンだらけのお便りを頂きました。郵便局の時間に間に合うようにと、いろいろ御札書きたいのですが、とりあえずゆつくりと拝読手紙を書きますので、今回は「了承下さいね。二〇二五年一年分（令和七年）年会費一万五千円」を受納下さい。光みち様 長屋璃子（令和七年生きているつもり）（1227 璃子）。新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。何をしているのだか頭こんがらがつておりまして申し訳ございません。まともなのが一句でもあればと思っております（1.4由紀子）。新年あけましておめでとうございます。いつも白金葭を送り頂き有難うございます。いつも楽しく拝読させて貰っています。秀臣さんのエッセイに記述されており、「老いる」を改めて楽しく、また現実として受け入れることはなかなか難しいことかと存じております。その中の、周りの人々とのコミュニケーションの大切さと、楽しみながらの適切な運動、日々の何かについての趣味を生かして生活をすることの大切さが伝わってきました。光成氏が誌面に紹介されております、秀臣様が現役時代の職業がお医者様で、いられていましたことを、改めて驚きました。光成氏の芭蕉に対する解

説もなかなか持つて楽しみであり、旅の時は楽しく随行者をつれて行かれている様子が少しわかりました。これからは、いよいよ奥の細道に入るのでしょうか、次の後脚を楽しみにしております。※静けさや岩にしみいる蝉の声も一つです。句会での再会を楽しみにしております。当日は出席します。1月の句会に下記投句させて頂きますので何卒宜しく御願いいたします（1.12 寿幸）。ぽたん苑への吟行お誘いいただきありがとうございます。園内を歩き寒牡丹の観賞楽しめました（1.12 正美）。告別式があり、欠席です。体力も気力もなく俳句ができません。退会致します。大変お世話になりました（1.17 宏之助）。

我孫子日記	12/20 句会
	12/26 光会
	12/27 駅前クリニック・JH
*1	1/1 初詣
*2	1/4 賀客来る
	1/6 SBY・スズキ点検
	1/8 *4 五井歯科検診
	1/9 *5 上野寛永寺牡丹園
	1/12 *6 あわんとり（とんど）
	1/17 句会

*1 美しき隣の町や日脚伸ぶ
白菊の正月飾り渥美より
*2 この年に妻と二人の屠蘇を酌む
一つがやつとの雑煮餅
切株に初日射しをり大六天
千拓の碑のある丘に初詣（みち）

賽銭箱の周り氏子の鏡餅（リ）
初詣ネックレス垂らす地蔵さま（リ）

*3 賀客来るあけおめ&ことよろと
初写真小さくなりぬ吾と妻

*4 人日や北斗七星中天に
初写真小さくなりぬ吾と妻

*5 冬牡丹の背そびら餅花垂らしあり
万両の紅も並べてアプローチ

不昧公の白字掲げて冬牡丹

黄冠の一輪のみの冬牡丹

牡丹園一花も散らず冬牡丹

牡丹園千両万両紅凝らす

黄冠の香り楽しめ寒牡丹

葉の色も愛でる時あり冬牡丹

牡丹園出口ベンチに火鉢置き

石庭に渦をしつらえ冬牡丹

寒日和親王像の胸張れり（みち）
天衣てふ白の解ほぐるゝ冬牡丹（リ）

五輪とも虚弱児なるか冬牡丹（リ）
常磐津のよき名賜る冬牡丹（リ）

冬牡丹櫻大樹の影に入る（リ）
日輪は真上黄色の冬牡丹（リ）

日輪は真上黄色の冬牡丹（リ）
ありがたや火鉢置かるゝ牡丹園（リ）

*6 あわんとりとんど焼き子供とんども組まれあり

あわんとり煤の舞ひ来る火事思ふ
あわんとり時に中より竹のどん

謹賀新年と半紙を掲げどんと焼（みち）
校庭の真ん中に立つどんと焼（リ）

どんと焼旋風（むじ）が出来て煤が舞ふ（リ）
ブルドソグ寝そべって待つどんと焼（リ）

編集後記

今月の軽み以後は芭蕉の弟子の支考の虚実論について参考文献をあさり私見を書いた。芭蕉には蕉門十哲とか言われた優秀な弟子がいたが、芭蕉の軽みの本質は理解できなかつたらしい。余程難しかつたのか、わからなかつたのだとと思う。支考の虚実論をもう少し先へ行くと軽みに到達するのにと私は思った。いまだに軽みは俳風か精神かあるいはその両方のか決着をみていいないとか（④）。

白金葭 1月号（通巻 160 号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一 名義シロガ
ネヨシ令和七年 1月 19日発行 編集発行人 光成高志 発行
所 〒270-1119 我孫子市南新木2-1-1-7 光成方 投句先..メー
ル又はライン 印刷製本 喜怒哀楽書房〒950-0801 新潟市東
区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三&版画賀状と寒牡丹
&賀状の句&璃子さんの句集穴まどひの句の選